

マッチ売りの少女（1928）

LA PETITE MARCHANDE D' ALLUMETTES

メディア 映画

ジャンル ドラマ ファンタジー

製作国 フランス

色彩 B&W

時間 38分

公開情報 劇場未公開

【解説】

父オーギュストのモデルだった最初の妻C・エスランが女優になるというので、映画を撮り始めたルノワールは、それまでの文学や芝居をただなぞったようなフランス映画に不満を感じ、視覚的な表現を探究していったため、当時の前衛作家と同列に語られることがあるが、本作を見れば、単なる実験精神や反逆心で映画をオモチャにした芸術家とは180°違う、真の映画作家たる彼の心意気が感じられるだろう。実際、おもちゃ箱に迷い込む、すてきにファンタジックなシーンのある、30分に満たないこの掌編の中には、映画表現の全ての要素が被写体に注がれる愛情に比例してぎっしり詰め込まれている。アンデルセンの名作童話を自由に翻案し、少女がぬくもりを得るため擦るマッチの炎の中に見る幻は『不思議の国のアリス』めいてもいる。ある屋敷の中で温かなご馳走にありついた少女は好奇心の趣くまま、その中を探検し、動き出すマネキンに誘われて、いつしかおもちゃの国に遊ぶ。若くハンサムな鉛の兵隊の将校がエスコートしてくれるが、彼を妬く人形の娘が横やりを入れたりもする。そして少女を脅かす死に神のイメージ。それから逃れて馬で宙に舞って異次元の草原を駆ける二人だが、やがて馬上の死に神と一騎討ちとなる。将校が勝利を得、彼女は幸福に包まれるが、その時は既に天に召された後だった。花散る中を舞い踊る少女。その花は現実世界の彼女の頬に降り積もる雪に変わる。安らかな笑みを浮かべ絶命した少女を人々は哀れむ。彼女の横たわる軒下の家の窓には煌々と明かりが点っているというのに……。箱庭のセットに舞う雪の美しさ、見事なミニチュア撮影、天駆ける馬のイメージの強烈さ、エスランの可憐なバレエ。音こそ聞こえないが、これは一編のシネ・バーレスク。そして、本編を最後にエスランとジャンのコンビも終わりとなるのだった。

【クレジット】

監督	ジャン・ルノワール	Jean Renoir
原作	アンデルセン	Andersen
出演	カトリーヌ・ヘスリング	Catherine Hessling
	ジャン・ストルム	
	マニュエル・ラアビ	
	エイミー・ウェルズ	